

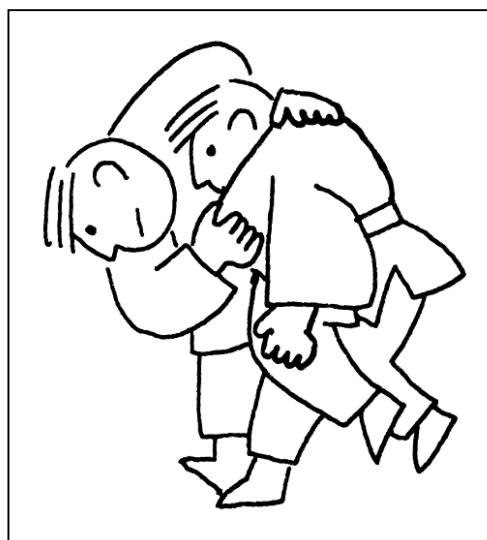
『知育・体育・徳育』

1. 「勝てば良い？」

北京オリンピックが8月8日から約2週間開催された。時差が1時間という事で、余り負担がかからずにTV観戦できた。野球などは11時頃まで試合をしていたが、最後まで見る事が出来たのが嬉しかった。

しかし、少し残念に思うのは、柔道やレスリングなどの判定が伴う競技のあり方である。格闘技と言いながら、時間制限で終わり、ポイントで判定するというルールなのだ。柔道は、本来「一本勝ち」を目指す競技のように思うのだが、ポイントが入ると「負けない」という事で腰を引いたり、掛け逃げをしたりという事で興味が半減するのである。

例えば、柔道では、内柴選手は「一本勝ち」にこだわり、もう一人の石井選手は、「判定勝ち」だった。石井選手は、優勝インタビューで「国士舘は負けない柔道・・・」と発言したが、TVの解説者だった篠原さんは「しゃべらない方がいい」と苦言を呈していた。「負けない」柔道と「勝てばよい」柔道との差は明確にはできないが、外国選手の多くが「勝てばよい」というスタイルだったので、それに巻き込まれないことが重要と思った。



2. 「知育・体育・徳育」

日本の言葉に「知育・体育・徳育」というものがある。教育の3原則なのですが、どうやら「徳育」が欠如し始めているように思うのである。「一本勝ち」という「美学」が薄れてしまい「柔道」から「JUDO」へ転換し始めているのである。石井選手のいう「負けない柔道」も一つの精神である。もともと、柔道は護身術なのだから、攻めて「勝つ」というよりは守って「負けない」という事が優先するスポーツと思う。

ところが、日本のお家芸から世界のスポーツに拡大した結果、柔道の基本精神が薄れて「勝つ」という点に重点がおかれるようになったのである。「正々堂々」という言葉があるが、その意味もルールに則って「勝つために」という点が大きくなったので、本来の「潔さ」という面が消滅しようとしている。有名な話であるが、1984年のロスアンゼルス・オリンピックで山下選手とラシュワン選手(エジプト)が金メダルを争ったのだが、右足ふくらはぎを痛めている山下選手に対して、ラシュワン選手は、そこを攻撃せずに終わり銀メダルになったという試合が思い出される。

柔道が世界に示した「徳育」という点での最大の試合であったと思う。相手が痛めているところを攻めれば勝つにものかかわらず、正々堂々と勝負して結果的に「横四方固め」で山下選手に押さえ込まれたのである。何か「美学」の粋を見るような試合であった。このように、「美学」という尺度が元来ある筈なのだが、「ルール」と「結果」という視点でその「尺度」が薄れて来ているのである。

3. もう一度、美学をとり戻そう

「21世紀の国富論」という本を書いた原丈人(ジョージ・ハラ)という方は、アメリカのシリコン・バレーで「ベンチャー・キャピタル」で財をなした方ですが、この方が、四半期で結果を出すというビジネス・ルールに異論を唱えて、長期視点に立った経営というものを提唱されている。たしかに、

ベンチャーへの投資は、短期の視野では不可能な分野であり、その世界で成功されたのだから、原さんの言葉に重みがあるのだ。

彼は、現状のビジネス界を憂えておられ、マネー・ゲームの対極である「脱貧困」という視点で世界の食料危機を救うためにバングラデシュで「スピルリナ」という藻の人工育成にチャレンジしている。原さんは、「このスピルリナには、100グラムあたり、65グラムから75グラムのたんぱく質が含まれているんです。牛肉なんかだと、約19グラムです。このスピルリナをうまく栽培できたら、効率のいい栄養源になるでしょう。実際、WHOが飢餓状態だったニジェールの子どものスピルリナを90日間投与したら、元気になったという報告もある。」と語っている。

参照: ほぼ日刊イトイ新聞 <http://www.1101.com/hara/>

さすがに、若い時、考古学者として世界を歩いた方の発想というものが浮かんで来る。考古学でも、新しい発見と認めってもらうには前人未到という世界を開拓する必要があり、彼は、南米の戦闘地域にも行った経験があるそうだ。今回、貧困対策にバングラデシュに飛び込んで、現地のNGOと組んで教育・医療の分野で実際の活動をされているので、20億円の投資が600億円のODA投資の効果を発揮するプロジェクト展開しているそうである。

発想を変えると意外な効果(伸びしろ)を発揮するのである。若い人が安定を求めて公務員や一流企業を目指しているが、発想を変えると自分の力量を発揮できる別の生き方が出て来るものである。原さんの生き方を研究するのも有意義だと思う。そして、自分なりの「美学」をもって生きて行きたいものである。

4. 「発想」と「根性」

確かに、原さんのような発想をする方もおられると思うが、その多くは、知識人というレベルで「胆」を据えて実際に実践するという人は皆無に近い状態である。少し、話が飛ぶが、「努力」と「才能」という関係も重要である。凡人が「幸せ」になるために、原さんのようにユニークな発想をもったとしても成功する人は稀有な存在である。「10年偉大なり、20年畏るべし、30年歴史なり」というのは、イエローハット会長の鍵山さんだが、オリンピックで8冠を達成したフェルプス選手は、「願いは叶う」と語っていたが、前回のアテネ大会で勝って、しかも、4年後の北京でも偉業を達成したのだ。この4年間、研鑽できる「才能」と「努力」の両方が合わさったものと言える。

私のような凡人でも「これはイケル！」という「発想」があって経営コンサルタントとして独立、創業したのである。数多くの仲間も同じように「夢」をもって、独立、創業したのだが、それから、約14年が経過してみると周囲に誰も残っていない状況である。成功したと言えないが、14年間で差が出たのは、「続ける」ということであり「10年偉大なり」という事につながっている。今、「20年畏るべし」を目指して頑張っている。「夢」を実現させる「才能」を磨く「努力」を続けて行きたい。

【まとめ】

1. 多くのことが欧米化して「結果」を追い求め過ぎている
2. 日本古来の「美学」を再認識する必要がある
3. 逆転の発想で伸びしろの大きい事でチャレンジする
4. 途中でくじけない「根性」こそ「才能」

【AMIニュースのバックログは <http://www.web-ami.com/siryu.html> でご覧になれます！】